丸山眞男の永久革命

柄谷行人

からたに・こうじん　一九四一年生まれ。思想家。『定本柄谷行人集』『定本柄谷行人文学論集』『哲学の起源』（岩波書店）、『トランスクリティーク』『定本日本近代文学の起源』『世界史の構造』（岩波現代文庫）、『世界史の実験』『世界共和国へ』『憲法の無意識』（岩波新書）、『遊動論』（文春新書）ほか著書多数。

著者解題

以下の丸山眞男論は、『現代政治の思想と行動』中国語版の「序文」として書いたものである。訳者の陳力衛氏（成城大学教授）に要請されてこれを書いたのは、二〇一六年の夏であった。本には陳氏による解題が付されるので、丸山の仕事全般について自由に書いてほしいという依頼であった。私は、中国では丸山がほとんど知られていないと聞いたので、彼の仕事の概観を書いておこうと思った。しかし、丸山が知られていないということでは、現在の日本でも本質的には大差ないのではないか。また、彼が提起したことは、今なお、というより、むしろ今後において重要となるのではないか。そのように考えながら、これを書いたのである。

ちなみに、本書の中国語版は二〇一八年に出版され、二〇一九年一月の『新京報』の書評欄で、前年に出版された本のベストテンに入り、賞を与えられた。

（編集部注：収録にあたっては、読者の便を鑑みて、編集部で適宜小見出しを付した）

丸山眞男は日本の思想史や政治史に関して多くの重要な著作を残した学者であったが、同時に、生涯、移り動く政治的な言論の場で活動を続けた思想家であった。以上の二つは切り離せない。そのことは、本書（『現代政治の思想と行動』）においてもよく示されている。これは、第二次大戦後一〇年ほどの間に、ジャーナリズムに発表され大きな反響をよんだ評論を集成したものである。ここには、さまざまな問題意識が一つの体系に統合されることなく存在している。そして、丸山自身、それらを生涯にわたって追求したのである。

これらの論文が書かれた時期は、二つに分けられる。第一の段階は、一九四五年から五一年までで、このとき、日本は、ソ連をふくむ「連合国」による占領統治下にあった。事実上、米国が占領統治したのであるが。この段階では、一方で、アメリカ風の民主主義が礼賛され、同時に、日本の共産党が強い権威をもった。この状態は、中国革命、朝鮮戦争の勃発とともに、米ソ対立が深刻化したために終った。第二の段階では、日本が占領下から脱して急速に経済復興をとげるとともに、ナショナリズムが復活してきた。たとえば、旧戦犯であった岸信介が首相となったのである。彼が推進したのが、日米安保条約をより積極的な軍事同盟とする改定であった。一九六〇年に、それに反対する運動がかつてない規模の市民運動として高揚した。

丸山の各論考はこのような政治状況に対応して書かれたものである。したがって、第一の段階で、彼は、戦中・戦前の日本のファシズムに関して考察し、第二の段階では、戦後の米ソ対立の下で顕在化した政治や文学の問題を論じた。これらの著述はそれぞれ、人々に鮮烈な印象を与え、新たに物事を見る可能性を開示したのである。

「無責任の体系」論からのはじまり

第一の段階で、戦前のファシズムが論題となったのは、戦後、それに対する批判と反省があったからだ。それはたんに国内だけにとどまらなかった。第二次大戦における「連合軍」は戦後、ドイツと日本で戦争犯罪を裁く国際法廷を開いた。ドイツではニュールンベルク裁判があり、日本では東京裁判があった。それらが入り交じって、戦前のファシズムが大きな問題となったのである。当時の意見は大体、二つに分けられる。一つは、ファシズムをアメリカ的な民主主義の観点から批判するものであり、もう一つは、ファシズムを独占資本が国家権力と結託するところに成立するとみなすものである。

しかし、丸山は日本のファシズムを、それらと異なる観点から見ようとした。たとえば、彼は「日本ファシズムの思想と運動」で、ドイツのファシズム（ナチズム）と日本のファシズム（天皇制ファシズム）の違いに注目した。丸山の考えでは、ナチズムは、ワイマール民主主義の中から出てきた「下から